

まえがき 宮本瑞夫
序文 — 出版に寄せて | 渋谷雅英
刊行にあたって | 編集委員一同

論説編

第1部 総論

- 1 渋谷敬三のアチックミュージアム—宮本馨太郎の仕事を中心として | 宮本瑞夫
- 2 映像史における渋谷・宮本フィルムの価値とその保存・継承 | 岡田一男
- 3 宮本馨太郎 始まりの映像民俗学—昭和初期における「郷土映画」の構想 | 北村皆雄
- 4 渋谷敬三の二つの転回点—渋谷栄一、宮本勢助・馨太郎からみた映像と民具 | 原田健一
[コラム] 渋谷家三代—栄一、篤二、そして敬三(井上潤)

第2部 記録映像の意義

- 1 方法としての現地上映会—現代に生きる映像資料 | 高城玲
- 2 映像資料から見るハーモニアスデベロップメント—三つの「花祭」映像という実践 | 小林光一郎
- 3 今、花祭の全記録に挑む—花祭の継承における映像記録の意義 | 佐々木重洋
- 4 アチックミュージアムのウルサンでの活動とその現代的な意味 | 李文雄
- 5 多島海の現代 | 高光敏
- 6 記録と記憶 | 崔吉城
[コラム] 『日本常民生活絵引』の課題(田中禎昭)

映像解説編

I— 花祭

- ①『花祭をたづねて 三河北設楽郡 足込』小林光一郎
- ②『花祭 三河北設楽郡にて』小林光一郎
- ③『花祭 東京三田綱町邸』永井美穂
- ④⑤『三河地方旅行』『三河北設楽の旅』伊藤正英
- ⑥『奥三河の花祭 愛知県北設楽郡東栄町 下栗代の花祭』宮本瑞夫
[コラム] 花祭の現状(山崎一司)

II— やま・かわの民俗

- ①『地理風俗資料 奥利根の流れ 群馬県利根郡水上村』内田順子
- ②『片品川に沿うて』内田順子
- ③『昔時の運輸制度、伊那街道の中馬』櫻井弘人
- ④『越後三面行』佐野賢治
- ⑤『三面風景』原田健一
- ⑥『男鹿、能代、藤琴、石神、八戸』昆政明
- ⑦⑧『谷浜』『桑取谷』真野俊和
- ⑨『粟島所見』原田健一
- ⑩『越後三面の記録 第三篇刳舟の製作 第四篇狩猟』原田健一
[コラム] 宮本馨太郎の民具研究(田辺悟)

を最後に、敬三による民俗記録映画の制作は途絶えている。

4 — まとめ

以上、アチックミュージアムで撮影された映画について、作品タイトルや収録論考の紹介を交えつつ、時系列で辿った。本書は、アチックの組織活動や撮影者個人の歴史、個別の作品分析やその意義などについて、複数の視点から分析を試みた研究報告書であると同時に、関連する資料や対象となる映画自体をDVD収録したという点で、動的映像資料を広く公開するにあたっての利用まで含めた一つの実践例となっている。

映画資料群は本来すべてアチックの調査記録として制作されたものだったが、その後フィルム原版の収蔵先は分かれ、現在は敬三の撮影・制作したものは神奈川大学日本常民文化研究所(以下、常民研)ならびに公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館に、馨太郎の撮影・制作したものは一般財団法人宮本記念財団に収められている。元は形態のまとまった資料群である記録映画は、書籍にまとめられたことで個別の申請等なく一度に自由に利用(視聴)でき、かつDVD形式という汎用性をもって保存されている。動的映像を視聴する場合、可能な限り当初の真正な状態に近づけて再現するための機器や技術が必要となるが、関係機関の協力の下、教育や研究に資する資料が手に取りやすく閲覧しやすい形で利用に供されていることの意義は大きい。

所収内容の紹介に戻る。映画に対する仔細な分析や考察については、論説編の小林光一郎、佐々木重洋両氏の論考が詳しい。映像解説編の作品分析や巻末の作品リスト(撮影・編集年月日、フィルム形状や分数などについて記載)等は鑑賞時の参考になる。また、映画

の復元と保存に関し、敬三作品は下中記念財団EC日本アーカイブズ、馨太郎作品は株式会社ヴィジュアルフォークロアと内田順子とその中心的役割を担っており、1970年代から始まる一連の作業記録を岡田一男がまとめている。加えて利活用という点では、現地上映会等を通じて鑑賞者が身体動作や感情を共有することの意義について、常民研の高城玲が記している。映画そのものと共に、資料に関する基礎情報や考察も同時に確認できるという利用形態に、冒頭で述べた動的映像アーカイブ公開にあたっての一方論が提示されていると評者は考える。

ところで、ここでアチック資料全体の収蔵先の変遷について確認してみる。資料の寄贈を受けた民族学博物館の活動は、太平洋戦争の影響を受け縮小するも、1952年の博物館法施行に伴って再開されている。しかし施設の老朽化に伴って、資料は62年に文部省史料館(現国文学研究資料館)に移り、のちに民具類は国立民族学博物館に継承された。(なお、敬三フィルムを所蔵する常民文化研究所は50年に財団法人化され、82年には神奈川大学の付属研究所となり現在に至っている。)

このように、全体としてのアチック資料の変遷については上記の言及があったものの、本書の主題である記録映画自体に関しては記述が少なかった。映画資料群について、いつ頃どのような理由で全体から枝分かれしたのか、また敬三フィルムについてはなぜ収蔵先が二機関に分かれたのか、評者としては詳しく知りたい所であった。本書はアーカイブ学に関する書籍でないが、以下はその学問に身を置く立場からの提案である。映画を所蔵する機関の名称だけでなく、資料が各機関に収蔵されるに至るまでの経緯(および可能であれば根拠となる関連資料の所在等)のようなコンテキスト情報の明記があれ

